

若返り薬

夢野久作

青空文庫

太郎さんはお父さまから銀色にピカピカ光る空気銃を一挺頂きました。大喜びで毎日毎日雀を撃つて歩きましたが、一匹も中りあたません。そのうちに弾丸たまが一発も無くなりました。

お父様に弾丸たまを買って下さいとお願いしましたが、

「まだ店がお休みだから」

と云って買って下さいません。雀は表でチュンチュン鳴いて、何だか太郎さんを馬鹿にしているようです。太郎さんは弾丸たまのない空気銃を抱いて涙ぐみました。

そのうちに不図お祖父様じいさまの手箱の中に赤い丸薬があつた事を思い出しました。ちょうどお祖父様じいは御年始に行かれた留守でした

から、そつとお室へ行つて床の間の手箱をあけて丸薬の袋を盗み出しました。

その袋の中には赤い丸薬がたった三粒ありました。空気銃に入れてみると丁度良い位の大きさです。

太郎さんは大喜びで三粒の赤い丸薬を持って表に出て、屋根の上にいる雀を狙つて一発放しましたが、中りませんでした。又一発——又一発——とうとう三粒共赤い丸薬を撃ちましたが、中りません。雀は知らぬ顔をしてチュンチュンと嘯つています。

太郎さんは急に丸薬が惜くなりました。もしやそこらに落ちていはしまいかと門の外へ来てみますと、そこには一人の老人の乞食がいて、三粒の赤い丸薬を汚い黒い掌てのひらに乗せて不思議そうに見

ております。

太郎さんは喜ぶまい事か、

「あつ、その丸薬は僕のだ。返しておくれ」と云いました。

乞食は鬚ひげだらけの顔を挙げて太郎さんをジロジロ見ましたが、やがてニヤリと笑つて、

「坊ちゃん。この薬は今しがた私がここにいるときに天から降つて来たのを私が拾つたのです。あなたに上げる訳に行きません」と云う中うちに汚い手で握り込んでしまいました。

太郎さんは、何という意地の悪い乞食だろうと思つて腹が立ちました。どうかして返してもらおうと思いましたが、しかたがあ

りませんから、お祖父様じいさまの丸薬を盗んだ事を話しますと、乞食はさもさも驚いたという顔をしました。

「それは坊ちゃん、大変ですよ。この丸薬は一粒飲むと一年、二粒飲むと十年、三粒飲むと百年、四粒飲むと千年、五粒飲むと一万年生き延びるのです。もし今日あなたのお祖父様じいさまが御病気になるられて、この薬を飲みたいと云われたらどうなさいます。そうしてこの薬がないためにお祖父様じいさまが亡くなられたらどうなさいます。あなたはお祖父様じいさまのお命を取ったも同然ではありませんか。そんな大切なお薬を雀の生命を取るために使うなぞと、まあ何という乱暴な坊ちゃんでしょう。私はあなたのような方にこの薬をお返し申す訳に参りません」

太郎さんは悪かったと思つて、たちま忽ちワツと泣き出しました。泣きながら乞食に、

「何卒どうぞどんな事でもしますから、その丸薬を返して下さい」

と頼みましたが、乞食は意地悪く頭を左右に振るばかりです。

「イエイエ、御返しする訳には参りません。この薬は私が飲んでしまいます」

と云う中うちに、乞食はその一粒をペロリと飲み込んでしまいました……と思うと、今までの乞食の汚い姿は見る間まに變つて、一人の立派な旅行商人たびあきんどの姿になりました。

たった一粒の丸薬で乞食から急たびあきんどに旅行商人たびあきんどに變つた姿を見て、太郎さんを見ながら、乞食の旅行商人たびあきんどはニツコリ笑いました。

「どうです、太郎さん、驚いたでしょう。私は一年前迄はこんな姿だったのです。こうして毎日毎日お薬を売って歩いたのです。売るお薬というのはたった五粒の丸薬で、名前を『若返り薬』というのでした。この薬を売って歩いて見ましたが、誰も本当にしてくれませんでした。

その中うちにあなたのお祖父様じいさまばかりは本当にして下さって、ねだんはいくらだとお尋ね下さいました。私が『一粒で一円、二粒で十円、三粒で百円、四粒で千円、五粒で一万円だ』と申しますと、『それではみんな買ってやるから、その中で一粒飲んで見ろ』と云うお話です。

私は惜おしい事と思いましたが、一粒飲みますと見る間に一年分だ

け若返りました。しかしお祖父様は『一年分だけ若返ったのではつまらぬから、今一粒飲んで十年分だけ若返って見せろ』と云う御注文です。

私が御注文通りに十年程若返って御眼にかけると、お祖父さまはお喜びになって、『それではあと百年分を一万円で買おう』とおっしゃってお買い下さったのが残りの三粒でした。私はそれから一年の間にすっかりその一万円を使ってしまつて、今年は乞食になつていたのです」

「そんなら、どうしてそんなお薬を手に入れたのですか」

と思わず太郎さんは尋ねました。旅行商人たびあきんどは黙つて次の一粒を

飲み込みました。するとそれと一所に旅行商人たびあきんどは一人の立派な若

い紳士の姿に変わって、髪までも真黒になってしまいました。

二粒目の丸薬で旅行商人たびあきんどから若紳士の姿にかわった乞食は、いよいよ驚いている太郎さんの顔を見て面白そうに笑いながら、又お話しを続けました。

「どうです、坊ちゃん、いよいよ驚いたでしょう。御覧なさい。

私は十年前ではこの通りの姿でこの国第一のお医者様だったのです。

私は音なしにしていれば、仕事は益々繁昌するばかりであったのに、思い切つて贅ぜいたく沢をしたばかりに、診みてもらいに来る病人の生命いのちの筋を一人に就いて一年分宛ずつ切り取つて、丁度一万年分集めてこの薬を作つたのです。この薬の作り方は誰も知っている

ものはありません。世界中にただ私ばかりです。この薬を作るためには丁度一万人の人が一年分宛^{ずつ}生命を縮めている筈です。

ああ恐ろしい。人間一人の生命^{いのち}が五十年として、私は二百人分の生命^{いのち}を取っている訳です。それを思うと私は生きている気持はしません。しかし人の命を助ける役目をする薬で雀の命を取るよ
うないたずら坊ちゃんほどに悪い人間ではありません。

良い者は御褒美^{ごほうび}を受け、悪いものは助けられるのが当たり前です。私は悪い事をした罰に今から直ぐに死んでしまいます。あなたもすぐに私の真似をなさい。左様なら、太郎さん」

と云ううちに、紳士は掌^{てのひら}に残っていた残りの一粒の丸薬を口に入れました。と思うと、そのままあと形も無く消え失せて、あと

には三粒の赤い丸薬が地びたの上にくろがつているばかりでした。太郎さんは夢を見たように驚いて、暫くはボンヤリその三粒の丸薬を見詰めておりましたが、やがて気がつくつと、自分もいよいよ死ななくてはならぬのかと思うと、情なくて恐ろしくて、身体がガタガタふるえて来ました。恐る恐る丸薬を拾つて家へ駈け込んでみますと、いつの間にかお祖父さんがお帰りになつて、火鉢にあたつておいでになります。

太郎さんは紙に包んだ三粒の赤い丸薬をお祖父様の前へ置いて、最前からの話をして、ふるえながら泣いてあやまりました。

太郎さんのお父様やお母様も、太郎さんの泣き声を聞いて何事かと思つて出て来られましたが、太郎さんのお話しを聞くと笑い

だして、太郎さんの背中を撫でながら、

「何を言うのだ、太郎さん。そのお薬はお祖父様じいさまが町から買っておいでになった、風邪引きの薬のお余りではないか。もう古い古い事だから利かなくなっているのかも知れない。それを若返りの薬だなぞと、お前は狐につままれてるのじゃないか」

と腹を抱えて笑いころげられました。しかしその中でお祖父様じいだけは笑われずにこう言われました。

「それは太郎の云うのが本当であろう。どんな小さなものでも間違ったしかたで使う事がどんなに悪い事であるかという事が、太郎にだけ本当にわかったのだ。他のものは皆嘘と云つても、太郎だけ本当と思えば、それでいいではないか」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※底本の解題によれば、初出時の署名は「海若藍平《かいじやくらんぺい》」です。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月31日公開

2006年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若返り薬

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>